

## 神戸女学院創立125周年記念講演

### 「美と愛の探究―

### C. B. デフォレストの苦悩と望み」

講師：竹中正夫先生

日時：2000年10月20日11：15～

#### ―記―

2000年10月20日(金)、学院理事・竹中正夫先生による神戸女学院創立125周年記念講演が、創立125周年記念式典に続いて11時15分より講堂において行なわれた。

記念式典終了後、休憩時間がとられ、講堂の左右一列ずつに座っていた中高部生徒が授業時間の都合で退席したのにかわって、一般の来聴者方若干が新たに入場された。

「美と愛の探究―C. B. デフォレストの苦悩と望み」と題するこの講演は、神戸女学院第5代院長デフォレスト先生についてのものであり、神戸女学院の精神にも関わる話であるだけに、「初期神戸女学院」の授業を受講している学生たちにも是非聞いてもらいたいと授業中に原田園子先生が紹介され、講演会への出席を勧められた。出席した学生たちからは講演会終了後にレポートが提出された。

この記念講演会は、記念式典に続く125周年記念事業の一つとして企画されたものである。ご講演いただいた理事の竹中先生は、学院チャプレン・飯 謙先生の講師紹介にあるように、神戸女学院と同じ伝道会(アメリカン ボード)が作った同志社大学の名誉教授で牧師でもあり、宣教師たちのことについても造詣の深い、この記念講演会にふさわしい講師である。

先生はこの講演のために本学院同窓生を訪問され、アメリカでも史料を集められ、講演当日配布の資料(A4版9頁、写真入り)作成に至るまで、ご自身で周到に準備された。

講演会は飯先生の司会で始まった。竹中先生は独特の口調で、語りかけるようにお話しになった。例えば資料に引用された英文を読み上げる時、声音をことさらに変えるわけでもないのだが、そこに込められた先生の感動が言葉と共に静かに会場に流れ出し、聞く者を引き込んでいった。この講演は、先生の語り口の妙と相まって、聴衆に、一人の生身の人間としてのデフォレスト先生を伝えるすばらしいものであった。

竹中先生のご了解を得て、以下にこの講演の内容全文を、飯先生の講師紹介・挨拶と共に掲載させていただく。

(佐伯裕加恵)

## 「美と愛の探究—C. B. デフォレストの苦悩と望み」

### はじめに

(飯謙先生)

竹中先生は1925年のお生まれです。京都大学経済学部、同志社大学神学部、そしてイエール大学神学部に学ばれ、1955年にイエール大学でPh.D.の学位を取得されました。学位取得前に帰国され、1954年から1955年まで日本基督教団の倉敷教会で牧師を、1955年から1996年まで同志社大学の神学部の助手、助教授、教授をお務めになられ、その間に学部長や学校法人同志社の理事、それから同志社大学人文科学研究所、アメリカ研究所所長などを歴任されたのでございます。1996年に定年でご退職の後、お隣の聖和大学教授に就任され、現在に至っておられます。1996年から、本学院の理事としてもご奉仕くださっています。専攻はキリスト教倫理学。多くの著作がございします。特に「神はメシである」という題の *God is Rice* が日本のキリスト教の特徴を記した書物として大変海外でよく知られていて、版を重ねています。また『倉敷の文化とキリスト教』『天龍の旅人』『良寛を愛したキリスト者』など日本におけるキリスト教受容についてのご研究も多い先生であります。本日は日本におけるキリスト教が大きな実を結んだものの一つと申せます本学院125周年の記念講演の講師としてこのような、まことにふさわしい先生をお迎えできますことを嬉しく存じます。

(拍手)

### 講演

只今ご紹介いただきました竹中<sup>たけなかつ</sup>正夫<sup>まさお</sup>でございます。しばらく前に城崎<sup>じょうさき</sup>院長から125周年の記念講演をするようにということを承りました。今までの記念講演をされた方々の記録を見ますと、内外の著名な文化人あるいは碩学相次いで来られて非常に幅の広いお話をしておられます。至らない者が何って大変恐縮いたしております。私は、今、日本の大学は大きな変革期にあると思っております。そういう中に、大事な事は何だろうかということを共に考えてみたいと思っております。



竹中正夫先生

## デフォレスト研究の意義

先般、KCC—Kobe College Corporation のお招きによりまして、<sup>はらだ</sup>原田学長をはじめ5人の先生方のお伴をいたしまして、米国における女子の高等教育機関としてこういう時代の女性のニーズに応じて活発な働きをしているいくつかの学校を見せていただきました。いろいろな感想があるのでございますが、



Miss C. B. DeForest

それらの責任者の方々が異口同音におっしゃることは、「われわれの大学の創立の時から伝えられてきた伝統を生かして、この時代の女性のニーズに応えることだ」と、そういうことを非常に強く訴えられました。そういう点から私は今回、神戸女学院の教師としてまた院長として文字通り神戸女学院の精神をそのお身体に具現した C. B. デフォレスト先生(Miss Charlotte Burgis DeForest)の御働きを学び、私の記念講演としたいと思ったわけであります。

先程は“Beauty Becomes a College”という、デフォレスト先生がこの岡田山に1933年に移った時にお作りになった美しい詩を澤内先生<sup>さわうち</sup>の曲に合わせて一同歌わせていただきました。その表現を用うるならば、Kobe College Spirit Becomes a Person.—Kobe College の精神が一人の人物に受肉したもの、それは C. B. デフォレストであると私は思っております。

デフォレスト先生につきましては、ご列席の方々の中には直に<sup>じか</sup>学ばれた方々もあると思いますし、また多くのデフォレスト先生を敬慕する文章が書かれております。そういう点では、私のような者がここに出てきて C. B. デフォレスト先生について語るということは、ある点ではおこがましいことでもあり、釈迦に説法のような感じさえいたします。しかし私は近代日本におけるキリスト教のことを考えている一人の学者といたしまして、C. B. デフォレスト先生の研究はこれからであると思っております。なぜでしょうか。

デフォレスト先生についての今までの研究は2つに分かれると思います。

1つには、C. B. デフォレスト先生は偉かった、私たちはデフォレスト先生のこういう点に感銘した、こういう点で敬慕してやまないという讃美の声がこた

ましております。デフォレスト先生は神戸女学院においては富士山のような存在であります。聖山(Holy Mountain)といてもいいぐらい聖なる存在であります。しかしながらそのデフォレスト先生の内的な苦しみ、闘い、悩み、祈り、葛藤、そういうものを私たちはどれだけ理解しているのでしょうか。

また他方においては、デフォレスト先生を、社会的な視点から批判する人たちもあります。『神戸女学院百年史』の「各論」にはそういう論調も散見されるわけであります。しかしそのような人たちがどれだけデフォレストさんの戦時下のあの苦しい時代の内側の悩みにせまって、そういう原史料に沿って、研究されただろうか—と私は思います。だから、私はデフォレスト先生の研究はこれからなんだと思うのです。手放しの称讃でもなく、また現代の視点からデフォレストさんを批判するのでもなくて、あの当時の状況に戻ってその中で、彼女がどういう苦悶にみちた闘いをしたか、これを掘りおこす作業がこれから必要だと私は思っているわけです。それにはどうしても原史料に当たらなければなりません。もっと率直にいきますとデフォレスト先生の手書された書簡の研究をしなければなりません。これは次のいくつかの所にあります。

その多くはハーヴァード大学のホートン ライブラリー(Houghton Library)にあります。私はこの間、先程の研修旅行訪問を終えまして、数日間ボストンに滞在いたしました。いろんな招きもあったのですがけれども、私はホートンライブラリーにこもって勉強いたしました。そこにはマイクロ フィルムになって公開されているデフォレスト先生の1911年までの書簡もちろんございます。そこで係の方に私がとくに見たいのは1935年からの戦時下のデフォレストさんの書簡であると申しました。しばらく待っておりましたら車のトレイが運ばれてきました。これらは年代順に配列されています。これにはデフォレストさんだけではなく、アメリカン ボード(American Board of Commissioners for Foreign Missions)の宣教師たちの書簡のオリジナルが年代順にとじてあります。ゼロックスをしてはいけない、写真も撮ってはいけない、万年筆も使ってはいけない、ボールペンもいけない、鉛筆だけでやれ—ということで、鉛筆を5本ぐらい研いでもらいまして、数日間私はあたかも宝石

を見るようにして、戦時下のデフォレスト書簡を読んだわけでございます。

また KCC のシカゴの本部には貴重なデフォレスト先生の書簡が約30通ほどございます。そのうちの10通ぐらいは戦時下のものでありまして、非常に貴重なものでございます。また資料にも記しましたが UCBWM—これは United Church Board for World Ministries と申しまして、昔のアメリカン ボードであります。これが今度はクリーヴランドに移りまして Wider Church Ministries というふうに名称が変わりました。—このアーカイヴズを私は、これがクリーヴランドに移る前に、本学の理事をしておられましたデイヴィド ストウさん(Mr. David Stowe)のお父様お母様の好意によりまして見せていただき、また要所要所の記録のコピーを送っていただきました。

先程もご紹介にありました KCC の理事もしておられ、本学院の評議員でもある古屋夏子<sup>ふるや なつこ</sup>様はライブラリーの方のインターネットの国際的な専門家でいらっしゃるしまして、スタンフォード大学、イエール大学にはデフォレスト文書があることを教えてくださいました。その中にはペタス(Pettus)文書というのがございます。デフォレスト先生のお姉様が結婚されたのがウィリアム ペタスさん(Mr. William Pettus)で、私はペタス文書には必ずデフォレストさんのお姉さん宛ての手紙があるんじゃないだろうか—と思っています。私はまた時を得ましたらスタンフォード大学とイエール大学、それにスミス カレッジに行きまして、資料探索の旅をしたいと思っております。ですから、デフォレスト先生の戦争中の苦難の闘いについての研究はこれからだと思っております。その苦悩があり、祈りがあるが故に今日の神戸女学院があると言っても、決して過言ではないと思います。

さて、資料の I のところには略伝を記しました。すでに皆様よくご存知のことでございますのでこのところは割愛させていただきます。

## 美のころ

デフォレスト先生のご専門は英語学であり英文学でありました。また聖書を非常によく勉強された方でありました。同時に彼女は非常に文化的な資質を持った方でありました。そしてかなり古くから日本人の心、そしてそれを表した

日本人の詩歌に関心を寄せておられました。その前に徳川家康<sup>とくがわいえやす</sup>の家訓というものも挙げてございますが、これは同窓の川西市におられる今井多美<sup>いまいたみ</sup>様に宛てて、徳川家康の「人生は重き荷を負い遠き道をゆくが如し」という家訓を全部英語に訳しておられます。こういう点にも、デフォレスト先生は日本人の心を愛した方であるなあと感じさせられます。

わらべ歌の研究につきましては、鈴木浩二<sup>すずきこうじ</sup>牧師—私も師事いたしました神戸教会の牧師でありまして、本学の理事もされた方であります—が、こう言っておられます。「私は今より三十二、三年前の学生の頃ラルネデ先生に伴はれて（これは普通ラーネッド(Dwight Whitney Learned)とわれわれが呼んでいる同志社大学に永くいたアメリカン ボードの宣教師であります)、一夏を軽井澤で過ごしたことがあります。その時、お隣の別荘にデフォレスト先生が居られ、私は時々寄せて頂き、先生が日本の郷土々俗の研究をして居らるゝのを見て感服したことがあります。その当時(これは私の推察では1908年頃と思います)、日本各地のトンボ釣りの唄や螢<sup>など</sup>とりの唄や、その他子供等が無邪気に遊ぶ時の日本の拍子取りの唄の如きを澤山に集めて英訳していच्छやいました。」

今から90数年前、デフォレストさんはすでに日本の地方のわらべ歌をおそらく足で訪ねたりして丹念に集め、英訳をしていたのであります。このことは本学の元教授でありました二宮尊道<sup>にのみやたかみち</sup>先生によっても指摘されております。最近はこのわらべ歌とか日本の歌曲とかいうものは非常に見直されております。私の学生時代から存じ上げている本学の音楽学部の元教授の土肥<sup>どひ</sup>みゆき様にそのことをお話したんですが、「自分は西欧のピアノ曲を一生懸命弾いてきた、そして弟子たちを作ってきた。しかしここ数年は日本の歌曲に心を向けて山田耕<sup>やまだ こうさく</sup>作とか<sup>のぶとき きよし</sup>信時 潔とかこういう人たちの歌曲を一生懸命掘りおこして、それに伴奏をつけて演奏会をし、またその記録を出版している。すでに12曲出している」と。また京都におられる高橋<sup>たかはし みちこ</sup>美智子様は、「うしろの正面」というあのわらべ歌にちなんだところのエッセイを書いて非常に注目されています。現代ではそういう地方のわらべ歌というものに人びとの関心が集まってきているのですけれども、今から90数年前に、人々が皆、音楽といえば西欧を向いていた時代に、日本の

地方のわらべ歌を掘りおこしたこと、これは慧眼であり先駆者であると思います。

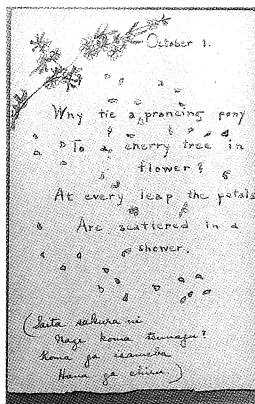
本学の図書館には30点にわたる、デフォレスト先生が直筆で文章を書かれ絵を<sup>か</sup>画かれたカードがあります。これはお父様お母様の結婚の34年の記念に、ちょうど西海岸からこちらに船で渡ってこられるその船旅の退屈をまぎらわせるために、彼女は30のわらべ歌をカードにして絵をつけて、そして日本語の原詞と英訳もつけましてこれを送っております。その原文が今も残っているわけがあります。

資料3ページの第1のところをちょっと見ましょうか。「咲いた桜になぜ駒つなく 駒が勇めば花が散る」昔から日本人は桜を愛しました。しかし日本人は愛する桜の花が散っていくところを非常にいとおしんだわけであります。デフォレストさんは、咲いた満開の桜に元気のいい馬を止めている、何ということをするんだ、馬がちょっと暴れたら花が散ってしまうじゃないかという、その桜をいとおしむ歌を選んで、これには10月1日という日附を入れて、両親に送っております。その右を見ましょう。October 5と書いてあります。10月5日でございます。「秋はくれゆく風ひくまいぞ きものきよとの母の文」というのですね。遠くにある自分の子供を思っ、秋風が吹いてくると、どうか風邪をひかないように着物をもう

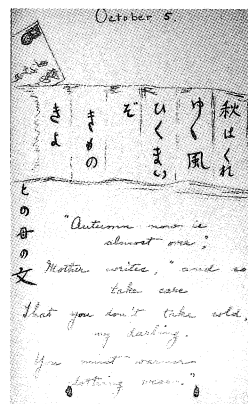
#### わらべうた集抄

一枚あわせてくれ—という母親の思い、ちょうど今頃の秋の思いをデフォレストさんは選んでおられます。こうした点に私は、この人の心というのは日本人の心を深く見つめ、それを appreciate 〈評価〉していたと思うわけでございます。

さてその次資料4ページの



桜



秋

上でございます。“Beauty Becomes a College”については、もうすでにご紹介がございました。私どもも歌ったわけでありますので蛇足をあえてつけ加えることはもう必要ないと思うんですけれども、それについて一言、私の感想を述べさせていただきたいと思います。わたしたちは、美というものについていろいろ考えます。特にギリシャ人は美というものを一つのアイデアの世界として、美しいものにあこがれておりました。そういう点におきましては、College is beautiful. といった時は私はそれはギリシャ的な表現だと思います。ところが、デフォレスト先生は College is beautiful. ではなくて、Beauty Becomes a College. といっておられる。私はこれはデフォレスト流の、ある点ではヘブライ的な考え方だと思っております。ギリシャ的な美意識によりますと、美はかなたにあるあこがれの的であり、憧憬されるものであります。それは客観的な思慕といってもいいでしょう。ところがヘブライ的な美意識は、神の美は賜物としてこの世の中に分け入ってこられる、そして美しいものを私たちの間に具現している、という考えであります。それは動的な関係概念であります。たとえば「ああ、麗しきかな、良きおとずれを告げる者の足は」(ロマ10:15)というロマ書の言葉がございました。これの元は旧約のイザヤ書の一節でメサイアの時などに歌われます。「よろこびの音信<sup>おとずれ</sup>をつたへ、平和をつげ、善きおとづれをつたへるものの足は美しきかな」(イザヤ52:7)―。どういう足が美しいのでしょうか。ディートリッヒ(Marlene Dietrich)のような足だったんでしょうかね。そんな足をもちたいなあと思っております。たとえば「立てば芍薬<sup>しやくやく</sup>、座れば牡丹<sup>ぼたん</sup>、歩く姿は百合の花」そういう足かもしれません。しかしわれわれはお互いにそういう足は持っておりません。「立てば大根、座ればボタもち、歩く姿はブタの足」―なんていう方がわれわれの現実には近いのでしょうか。しかしそういう足であっても、「ああ麗しきかな、良きことを告ぐる者の足よ」というわけであります。よき働きを人々の間でする人の足は美しいんだと。“Beauty Becomes a College”―多くの人々の祈りによって石や杭<sup>くい</sup>や柱や、そして自然の草花や、老いも若きも組み合わせられて、ここに Beauty はこの岡田山に宿ったのである。ヨハネ福音書では真理は彼方にあっ



て観想される対象ではなく現実の人間としてこの世に来て宿るものであります。言葉(ロゴス)は肉体となってわれわれの間に宿ったといっています(ヨハネ福音書 1:14)。これがヘブライ的な真理理解であります。美はわれらの中に人々の祈りと賜物によってこの岡田山に宿ったんだ。—こういう表現が記念歌の中に盛られているのではないのでしょうか。

### 戦時下の苦悩

いよいよ戦時下の苦悩に移ります。一言でいうとデフォレスト先生は日本を非常に愛した人でありました。非常な親日家であります。その親日家の先生は極限まで日本を愛するということを尽くされ、しかしながらその日本が戦時下においてだんだん軍国主義的になりかつ国家主義的になったことを非常に嘆かれたのであります。それだけに非常に悩まれた方であったと思っております。ちょっと証人に登場していただきましょう。本来ならばここに来ていただいて対談でもすればなおさらドラマのようになっていいんですけども、そういうわけにもいきませんので…。

第一の証人は篠原<sup>しのはら</sup> 愛<sup>あい</sup>さんであります。私はこの方を東京の郊外の町田市の玉川学園のうしろの小高い丘のお宅にお訪ねいたしました。去る7月11日のことであります。この資料にあるのはそのとき私の撮った写真であります。神戸女学院の高等部ならびに大学をご卒業になりました。大正2年生まれの87歳。現役の会社の会長さんをしておられます。彼女はこう言っています。「私は、女学部から大学部まで10年間女学院に学び、その後1年足らずの短い期間ではあったが、当時の院長デフォレスト先生のお傍<sup>そば</sup>で仕事をさせて頂いた。」つまりデフォレスト先生の秘書を一年間されたわけであります。「この11年、特に最後の1年は、私に計り知ることの出来ない多くの事を学ばせてくれた。特に、デフォレスト先生の日常の行動を通して、人の上に立つ者として心すべき点を学ばせて頂いたことが、どれ程感謝すべきであるか、年を重ねる程にその感を深くしている。」と述懐しておられます。卒業後すぐに彼女は結婚されます。翌年1936年に夫は病死されます。実家に帰り、身ごもっておられましたので出産をされます。夫が独り子であったためにやむなく子供は亡夫の親に渡し、縁を断

って、自らは夜学で英語を教えていたのであります。その時にデフォレスト先生が声をかけてくださった。「よかったら私のところで仕事をしませんか」と。そして秘書になられたわけであります。彼女は書いておられます。「当時は女性には何の権利もなく、戸主には絶大な力があつた。」(『神戸女学院のものがたり』「私たちの学生時代」を発行する会編、1999年、31頁)

さて教育勅語のことに移りますけれども、初めは日本人の教師がこれを読んでおりました。しかし内外からいろいろな話がでてまいりまして、やはりこれは学校の責任者、院長が読むべきであるという声が出てきたわけであります。デフォレスト先生はそれを受けて何遍も何遍も練習して読まれたということでもあります。当時の戦時下における教育勅語を読むということは大変な苦勞でありました。同志社大学の総長をされた湯浅八郎氏は誤読をいたしまして、それがきっかけとなって総長辞任に追い込まれています。また勅語ではありませんけれども明治天皇の御製を誤読したことによって、当時の組合教会会長である西尾幸太郎氏は辞職に追い込まれております。そういう状況で内外の人々がキリスト教学校や団体の責任者が誤読をしないかということを非常に注目している時に、その危険は百も承知で、デフォレスト先生は何遍も何遍も練習して、自分が院長である限りはこれはしなければならないと言ってなされたということを、伺うのであります。間違いはありませんでしたかと篠原さんに伺いますと、一箇所だけ間違えられたところがあった、と。どこですかと伺いますと、じゅんしゆ遵守というところを「そんしゆ」と読まれたことを篠原さんから伺いました。しかしそうまでしてこれを練習して読まれた彼女の心情というものは察するにあまりあると思います。

さて2番目。ご真影についてであります。ソール院長(Miss Susan Annette Searle)の頃からこれは懸案でありました。デフォレスト先生はそのことを、どうしたらいいだろうか、非常に悩んでおられました。つまり各学校ともご真影を迎えなければならないという世論が、また文部省からの意見が、ひしひしとやってくるわけであります。現に1936年にはもう放置できない状況になります。きしきくぞう喜志邦三教授は文部省に呼ばれて、ご真影下賜の申請を女学院はすべきで

あるという意向を受けます。デフォレスト先生はそれを皆さんと諮って、やはりこれは受けなければならない状況にあると判断されます。そしてヴォーリズ設計事務所に依頼して、ソールチャベルの南側に、ご真影の奉安殿を作られます。これは1937年の12月18日であります。奉安殿を作るということは一つのことですけれども、それをどういう風にするか、管理するか—これは大変なことであります。今日の言葉でいいますと詳しいマニュアルといいますか、管理の規定というのを作ります。日直をどういう風にするか、宿直はどういう風にするか、その報告をどうするか—これは教職員に課せられた大きな重荷であったと思います。デフォレスト先生は、その最初の夜の責任を自ら引き受けられるわけであります。誰も、よくわからない状況で最初の日の責任をもつことは大変なことであります。しかし女性として、しかも外国人の女性として、彼女は最初の夜の責任を負ったのであります。資料に記しておりますように、ある人々はご真影を守るということは大変なことなんだと再三彼女に申します。彼女もそれは重々承知してのこととございました。またその頃の神戸女学院の状況の中で、学院に恨みをもっている人がありました。いろんな事情があったと私は察するわけですが、とにかく学院にあまりいい感じをもってはいない人がいました。もしもその人が女学院に何かいたずらをするならば、ご真影の奉安殿を荒らすということが一番格好の材料であります。デフォレスト先生はそれを察して6週間の間、その奉安殿から本部の金庫にご真影を移しています。こうまで配慮をして安全を守ったんだなあということを私は思うのであります。同窓会は奉安殿のために当時のお金で1,600円寄附しておられます。またデフォレスト先生はご自分のお書きになった *The History of Kobe College* (75周年史)でこういっておられます。“The students took the event in a matter-of-fact way.—学生たちはあれこれいわずそういうことになっているんじゃないという形で受け入れた。The teachers had accepted their new duties with neither enthusiasm on the one hand nor protest on the other.—教師たちはまあことさら protest するのでもなく、またそれにことさら熱心にあたるのでもなかった”と、淡々として受けいれたと記しています。

さて3番目でございます。南京陥落にあたっての出来事です。アメリカン ボードの宣教師たちにおきましてはこれは一つの controversial issue 〈論争点〉でありました。当時のならわしといたしましては戦勝祈願のためにキリスト教の学校も含めて全ての学校は、神社に参拝するということが義務付けられておりました。神戸女学院では近くの広田神社であります。あそこは天照大神を祀る由緒ある官幣大社であります。阪神タイガースは近年まで毎年行っていたようでありますけどいつも最下位を指定席のようにしております。デフォレスト先生も行かれるわけであります。宣教師の中にはそれをあまり快く思わない人も当然あるわけです。デフォレスト先生はじっと我慢してその批判を聞かれます。お隣の聖和大学の前身の神戸女子神学校のその頃教授をしておりました E. ヒューステッド (Edith Evelyn Husted) という人は熱心な pacifist 〈平和主義者〉でありました。ですから、私の大事な指輪や大切な金属を人を殺すためには捧げないと言って金属回収に正面から反対した人であります。そんな中に、デフォレスト先生が広田神社に行く、あるいは南京陥落祝賀提灯行列に行くわけありますから、それに対する批判の手紙がアメリカン ボードに行くわけです。われわれのアメリカン ボードの同僚としてこういうことはちょっとどうかと思うと、そういう意見もボストンに行くわけです。私は、ボードはどう返事したろうかと記録を調べてみました。ウィン フィールド (Wynn C. Fairfield) という人が、ボードの担当幹事でありました。その人がデフォレスト先生に手紙を書いております。「あなたの事情は私たちはよくわかる。大変困難な時期に学校の責任者としての役割を果たしておられることを尊敬したいと思う。私たちボードの中にはいろいろな意見があるけれども、よく皆さんが祈って考えて決定されたことをわれわれボードは支持します」—という、非常に暖かい配慮をした、牧会的な手紙をフェアフィールド氏は書いています。いずれにいたしましてもこれは非常に controversial 〈問題を含んだ〉なことでありました。

私は、それじゃあその南京の陥落のあとでデフォレスト先生はどうしたかなと思ひながら、ずっと書簡をハーヴァードのホートン ライブラリーで見てお

りました。南京の陥落のあと広東が落ちるわけであります。香港も漢口も落ちるわけであります。デフォレストさんはこう書いております。これは Kobe College のレターヘッドで書いてないんですね。つまり1938年に、IMC と申しまして国際宣教協議会(International Missionary Council)が世界のキリスト教の会議をマドラスで開きます。そこに多くの代表がアメリカから行ってその帰りがけに女学院に寄るわけです。ピット ヴァンドゥーセン(Henry Pitney Van Dusen)とかウォルター ホールトン(Walter M. Horton)とか有名な人たちがその帰りに立ち寄るわけです。その中の一人にこれを渡すわけであります。onion skin のこの薄いペーパーに手書きにしたものでございまして神戸女学院のレターヘッドはございません。ですからそこに a letter through the hands of delegates to Madras, Nov.17, 1938 とあります。

それにこう書いてあります。“No, I did not go to any celebrations for the fall of either Canton or Hankow.一広東や漢口の陥落の祝賀行進に私は行かなかった。I probably would not have gone to the Nanking one if I had known at the time what I later learned about it.一私はのちに知ったんだけど、この南京でということが起きたか知っていたら私は南京陥落の提灯行列にも行かなかっただろう”と彼女は明言するわけであります。“We have here not seen not only copies of many of originals about Nanking, but many of the articles that had come out in the West, e.g. the Readers Digest. The July number was censored, but one of Japanese friends got the copy that some how escaped the censor and she was almost sick over what she read in it. Japan is no longer following Bushido.”

自分で、この censor 〈検閲〉された封筒の表紙を切り抜いて南京についての article は censor されたと(書きます)。ちょっと小さいんですけど読んでみましょうか。これは大阪中央郵便局外国郵便課がわざわざ貼り付けたものです。「本出版物第28～31頁ハ安寧秩序ヲ紊スモノト認メラレ削除處分ニ付セラレタルヲ以テ右個所削除ノ上送付致候條此段御了知相成度」とあります。わざわざこれは検閲したとあり、デフォレスト先生はこれを丁寧に自分で切って文書に

貼り付けておられます。そして日本の武士道は地に落ちたと嘆いておられます。

物語はそれで終わりません。翌日そのことを伝え聞いた新聞記者が院長室にやって参ります。「デフォレストさん、昨日あなたは広東の陥落提灯行列に行きましたか」と聞くわけです。もちろんデフォレスト先生は「行かなかった」と言います。「じゃあなぜあなたは行かなかったんですか、理由を述べて下さい。」と新聞記者は詰問いたします。“I replied that I had nothing to say, no thought to express.—ノーコメントである、私はそれに対して言うことは何もない”と。そうすると新聞記者がやっぱり聞くわけであります。“‘But aren’t you glad it has fallen?’—広東が落ちてあなたも喜んでいるのではないのでしょうか”と。“I said, ‘I feel so deeply the loss of life and destruction of civilization that I can’t feel anything else.’—そこに多くの人々の生命が失われ、そして文明の崩壊があった、私は喜ぶことはできない、私はそれ以外のことは考えないと言った。”すると、“‘Well’, said he, (新聞記者はさらに追求するわけであります。) ‘don’t you rejoice that this is the step in the bringing of peace to the Orient?’—東洋に平和をもたらすその第一歩じゃないか”と聞くわけであります。“I replied, ‘If I were convinced that is so, I should feel happier.—そうであるならば私は大変嬉しい。As it is, my heart is dark.’—しかしながら現在においては私の心は暗い”と答えます。さらに新聞記者は問い詰めるわけです。

“Then ‘do you think this war had better not have been begun?’—こんな戦争しなかったらいいんじゃないか、と?” もしもしなかった方がいいと彼女が言ったら、これは、非戦論者として彼女は捕らえられる可能性の充分にあるわなに満ちた質問なんであります。デフォレスト先生は “As to such a great international question that I replied. ‘I do not express an opinion.’—そのような大きな国際関係の問いには私は意見を述べたくない” と申します。その次に書いてある言葉に、私は非常にぐっとくるものを覚えました。“I must have tears in my eyes.—そう答えた時に私の目には涙があったに違いない” と彼女は自分で書いております。その緊迫した状況を察して秘書室の人は喜志教授にすぐに伝えました。喜志教授が現場にやって来て、まあまあと言って会話を違

う方向に向けていったということでもあります。しかし皆は非常に恐れたのであります。明日の新聞にはどうでるだろうかということでもあります。しかし彼女はこう言ってます。“I'm not afraid,一私は恐れない。—I realized after wards 一のちに(一つの反省を込めて彼女は書いております。)—that I had not expressed my real faith—私の信仰をもっとあそこではっきりと言うべきだったなあ(という反省をしております。)—namely, that God works through history and over rules men's mistakes and sins—つまり、神は私たちのあやまちや罪をも用いて歴史の中で働き支配しておられる。—and is able to bring good out of evil.—そして悪からも善をもたらす方である”と。“I am sure that is the only thing that enables us face the world's situations these days.—今日この信仰こそが私たちを世界の状況に立ち向かわせるものである”と信仰の告白をしているわけであります。

### 戦時下の女学院

戦時下のキャンパスであります。こういう中においてこの学校はいったいどうだったろうかと私は『めぐみ』をずうっと辿ってみました。国民精神総動員、文部省が出した『国体の本義』を皆が学び、尽忠報国、事変献金などがずっと『めぐみ』には出てまいります。この事変献金は73回にわたって行なわれております。そして合計2,784円60銭集まっております。その時デフォレスト先生はじめ教師の人たちは、これをどこにやるかということはお決めになりませんでした。学生会の生徒たちにこれを決めることを委ねておられます。ですから当局から聞かれた時に、どうしてこれをこっちにしないんだと言われた時に、これは学生たちが自発的に決めたこととございます、こう言っております。私はその点におきまして戦時下の非常に苦しい厳しい時代においてもこの学校においては学生の主体性を重んずるというものがあった—と。これは非常に貴いことである、と思っております。どんなところにやったんでしょうか。50円を天津水災慰問にあげる。同じような中国の学校、南京キリスト教連盟に捧げる。あるいは中国人の教会に捧げているわけであります。そして赤十字病院の包帯の献金に捧げる。こういうタイプの働きに捧げています。これは学生たちが選

んだのであると示されております。そうこうしているうちに時勢は非常に厳しくなりまして、学校報国隊の結成というものが成されてまいります。そういう中にデフォレスト先生はやはりわれわれは聖書に立ち返ってこの学校におけるキリスト教の理念をこの時代に再認識すべきだと、木村清松<sup>きむらせいまつ</sup>であるとか徳<sup>とく</sup>憲<sup>のり</sup>義<sup>よし</sup>というような伝道者を迎えて伝道集会を盛んにいたします。ある点では小リバイバル〈信仰復興〉が戦時下のこの岡田山に起きるわけであります。そこでかなりの学生たちが入信の決意をいたします。そしてその中にはデフォレスト先生が中国に行かれたのち、中国の人たちは和解を望んでいるし、そこに出ていって中国の人たちに日本語を教えるところの日本人教師が必要であるということ話をされます。2人の学生が私は行きたいということを言います。デフォレスト先生はその学生たちを呼んで、それはそんなに簡単なことではありませんよ、中国の人たちは今日本の人たちを憎んでいる、「あなたたちはその憎しみに耐えることができるでしょうか。そして何よりもあなたたちは中国語を話すことができるでしょうか」と聞くわけであります。「いや私たちは中国語は勉強していません。」「中国語を勉強しなくては中国に行くことはできません。」その頃の神戸女学院のカリキュラムの中に中国語はありませんでした。「じゃあ非常勤講師でいいから頼んで中国語のコースを作りましょう。」こう言っておられます。そういう中で彼女がアメリカン ボードに書いた報告書、これはわずか2行でありますけれども、非常に美しい文章であります。“There the new inner life is struggling—struggle 〈苦悩してもがいている〉けれど新しい内なる生命が芽生え外の奉仕へとむけられています。—to fulfill itself in out ward service. And the leaves of the tree of life shall be for healing of the nations.—諸国民のいやしとなるそういう木の木の葉が今ここに芽生えつつある”と彼女は報告しております。しかしながら現実のはもっと厳しくなって参ります。これはKCCのPresidentをしていらしたウィルソン夫人(Mrs. Hazel Thorne Wilson)に書いておられる手紙です。1938年4月6日付であります。“I have heard that some detective(これは探偵という意味ですけれどもおそらく特高警察という意味じゃないかと思えます) has said—特高がそういうことを言って



いることを聞いた”と。“—that if they should try to ‘draw the net, there would be plenty of scores on which they could get K.C. —神戸女学院をワナにかけてしまおうと思えばそれはたやすいことだと特高の人が言っていることを私は聞いた。But we are not living in any immediate fears of such prospect. —そんなことがすぐ起きるとは私たちは考えていない。We have a great many friends—幸いにして私たちは外にも内にも多くの友達をもっている。—and a good new enrolment. —そして多くの新入生たちがやって来ます”と。さらに聖書の言葉を引用しています。“II Timothy 1:7 is a very good verse for these times. —こうした時代においてはテモテの第2の手紙の1章の7節は非常に示唆のある聖句だ”と。読んでみましょう。“for God did not give us spirit of timidity but a spirit of power and love and self-control. 一神は臆病の霊ではなく力と愛と思慮分別の霊を私たちにくださったのです”。特に、この臆病の霊ではないということに注目したいと思います。彼女はそういう困難の中に聖書に堅くたって祈りをもってこの学園を守ったのだなあと私は思います。

### 女学院を守る心

さて2番目、女学院を守る心というのであります。私は非常に感銘しながらこの書簡を読んだのであります。それは1938年の1月13日付の手紙でありまして、宛て先はコーベ カレッジ コーポレーションのウィルソン会長であります。大学の主事喜志邦三氏について書いています。“You know Mr.Kishi, our college head teacher, is not a Christian, in spite of his thirteen years of cordial work here and his nice Christian alumna wife.—彼の奥さんはこの卒業生でありクリスチャンでもある。彼は13年間教授会の中心として働いておられる。しかし彼はキリスト者ではない。I told him last month—先月私は彼にこういう風に言った。we could not tell the future of our Christian institution here.—こういう状況になるとキリスト教の学校がいつ閉鎖されるかわからない。If we come to desperate strait,—非常に困難な状況になったならば—of course, we Christians were prepared to suffer for our faith—

われわれキリスト者はわれわれの信仰のために苦難を負うという心構えをしている”と述べます。“it would be too bad for him, still young with a future ahead of him—彼は非常に有能な人でありまだ若い。そして将来ある人がこの学校と共にそういう犠牲を負うということは忍びない。”そこで彼女はこう言うわけであります。“to get be released from his appointment as head teacher before it expires in 1939. —やがて1939年まで契約があるが、それが終わる前でもどうぞ自由になさってください。もしもほかからお招きがありほかに道があるならば、戦時下の苦しい状況の中にあるこのキリスト教の学校に無理に留まるに及びません。”そして“I would not hold him to his contract. —それ以後の contract 〈契約〉を無理に私はしようと思わない。After some elucidating conversation,一少しゆっくり話したのちに、he was fully convinced that I meant just what I had said.—私の言った真意を彼は理解してくれた。Without ulterior meaning,—うわべの表現ではなくて彼は心底からこう言った。‘I am not a Christian, —私はキリスト者ではない—but I think I am not behind others in my loyalty to the school, —しかしこの女学院に対する私の誠実さにおいてはほかの人たちには遅れをとるものではありません。I have no thought of wishing for release.’—私はここからほかに移るつもりはございません。”そう喜志教授は言うわけであります。“That stand of his has made it easier for me to proceed as I think best without regard to the fact of his not yet being a Christian.—彼はまだキリスト者ではない。しかしその忠誠心を聞いて私は彼にまた続けていただこうと思った”と記しております。“I do not despair of him yet! —私は彼に落胆していない。I thought it brave of him. —こういう彼は非常に勇敢な、勇気のある人だ”と思ったと記しております。私は神戸女学院が今日125年のお祝いをしているというのは、こういう戦時下におけるデフォレストさんを中心にしながらキリスト者とキリスト者でない人とが一緒に協力し合ったという賜物ではないかと思うわけであります。

### 当時の学生の証言

もう一人の証人にここに登場していただきたいと思います。それは皆さんよ

くご存知の武田<sup>たけだ きよこ</sup>清子さんであります。私は、この方とは長い間、世界学生キリスト者運動とか世界教会協議会の働きで一緒に働いた同労者であり先輩であります。先日私は、武田さんをお訪ねすることはできなかったんですけれども、電話でお話してその頃の状況を伺いました。すまないけど写真を送ってくださいと言いましたら、いやだわ、私の写真なんてとおっしゃったんですけれども送っていただきました。その頃彼女は女学院の学生だったんですね。大学に在学しておられまして、デフォレスト先生の先程いいました国際的精神に触発されてオハイオのオリヴェット カレッジ(Olivet College)に第2回の交換留学生として行かれ、その前にアムステルダムの世界のキリスト教青年会議に出られた方であります。おそらく神戸女学院の中でも最も ecumenical な最も international なキリスト教の働きをされた卒業生の一人であります。彼女はこう言っています。「思想史的に見た昭和期の神戸女学院を、一学生としての体験からふりかえって考える時、それは、超国家主義的軍国主義が国民の思想と生活の隅々にまで浸透して、自由に思想し行動することを封殺してゆく、まさに『暗い谷間』の時代にあって、嵐にゆさぶられながらも、岡田山の上に静かに“灯”をともして立つ学園であったということだと思う。女子の学校であったということもあり、烈しい闘いをしたというような足跡はそこには見い出せない。しかし、『日本に根をおろしたピューリタニズム』（これは武田さんのデフォレスト先生をまとめた言葉であります。）、逆に言えば、日本の伝統に深く根を持ちながら、イエス・キリストに応答しよう、日本の狭い『枠』を破って、それを超えた普遍性へつながろうとして、ささやかでも、自分たち一人ひとりに期待されているミッション(これは使命という意味と思います。)は何かを探し求めて、道をきりひらこうとする希いの灯を内深くにともされた学生たちが、このような時代にも、割合にのびのびと、静かに育まれていた学園だったと私は思う。」

最後のところが印象的です。デフォレスト先生というめんどりの翼のかげに、この岡田山において、戦時下の暗い谷間の時代においても割合にのびのびと静かに育まれていった学園であったというのであります。

さてデフォレスト先生は1939年11月琵琶湖畔で開かれましたアメリカンボード宣教70周年記念に出席されます。そのすぐあとに部長会を院長室で開いておられたその最中に倒れ、2か月間、宣教師館であるケンウッドで静養されます。しかし医者のお勧めによって帰米静養されることになります。私はそのあとをずっと書簡で追っていったんでありますが、ある人々はすぐに先生は引退宣教師の住居のあるピルグリム プレイス(Pilgrim Place)に入られたようにも考えられておる。私もそうじゃないかと思ったんですが、そうじゃないですね。2月から5月20日まで彼女はピルグリム プレイスから30マイルばかり離れたサナトリウムで療養しております。どんなに彼女の病状がひどいものであったか、深刻なものであったかを知ることができます。

### ユーモアの人

さて最後のところであります。細かい心づかいということではありますが、これは先程の篠原さんも言うておられます。非常に小さいところまで隅々にわたって配慮をされた。一人一人の面倒を見られた。これは同窓の方々が異口同音にたくさんの方々が記しておられるところでありまして割愛いたします。ただ篠原さんの言うておられる一つのジョークがあります。「愛さん、あなたは3つの井戸の話を知っていますか」とデフォレストさんが言われます。「いやあ、そんなのは知りません」と言いますと、“Well, well, well.”と笑わせた。その頃デフォレスト先生は神戸女学院に井戸を掘ると言うことを真剣に考えられました。私は文献でそれを探してみたんですけれども、“The digging of a larger well on the new campus”というところがちゃんとあります。“seventy feet deep and four feet wide. —70尺の深さで4尺の幅”。吉田さん(前総務部長)に聞きまして、これはどこかにあるに違いない、どこにあるんですかと探していただきましたら、講堂を出たところのちょっと左のところには今は古井戸があります。だいたいそれらしい大きさのものがございます。私は阪神大震災でやはり水というものがどんなに貴重であるかということを知らされた今日、神戸女学院においてもこのデフォレストさんが計画された井戸をもう一度掘りおこしてみたらいかがかと思っております。そしてデフォレストさんは、この井

戸のことではないんですけれども、この講堂はスミス夫人(Mrs. Emily White Smith)を記念して...というふうの一つ一つのところに記念の寄附を集められました。井戸にまでそうでありましてある一人の婦人がドナーとなりましたが、その名前はウェレット(Wellet)という井戸にちなんだ人がちゃんと寄贈者になっていることも『ミッショナリー ヘラルド』(Missionary Herald)に記されております。

さて、これは小さいことなんですけれどもミセス ウィルソンに書いたデフォレストさんの手紙があります。“I find, Ellyn, (エリンという方はウィルソンさんの片腕となった KCC のオフィスにいた方であります。) that I did not need to use all the money I drew—私がいただいたお金を全部使う必要がなかった。なぜならば friends have saved me taxi fares at both ends.—送り迎えばタクシーでとタクシー代をもらったけれども自家用車で送ってもらった。少し save できた。So I enclose \$1.06 extra from my journey.—だから私の旅行代から 1 ドル 6 セントお返しいたします。I used an upper berth instead of a lower, and changed to day coach at Ithaca.” アメリカを旅行された方はご存知ですが、今は飛行機が多いんですけれども、私たちが学生時代はお金がないものですから汽車で旅行しました。プルマンというのがあります。寝台車であります。上の方が少し安いんですね。デフォレストさんはアメリカの人たちが下の寝台を買っておられるのに彼女は交渉して上の方に上げてもらうわけです。そこで 4.5 ドル節約したと。エティカといいますとこれはコーネル大学(Cornell University)のあるところで、そこでコーチにかわった。そこでまた数ドル節約した。そしてこう言ってます。“I find such the easiest ways of that ‘saving’ which is ‘earning’. —節約することは儲けることである。” やってるなあと思います。節約することは儲けることであると言ってですね、笑いながら旅を続けてるデフォレスト先生を、私はほほえみをもって見るわけであります。

もう一人の人、この方は、和栗<sup>わぐり</sup>さんという方で、おもしろい逸話をたくさん書いておられる方であります。彼女はこう言っています。「今から五十三、四年

前の事(だから私の計算では1920年頃であります。大正9年頃です。)、丁度私が阪急梅田駅から出た途端のこととございました、デフォレスト先生の帽子が駅前の群衆を抜けて線路を横ぎる所を見付けましたのは。(あ、デフォレスト先生だと彼女は思ったんです。)当然私は先生を一目散に追いかけてました。と、先生は駅前のムサクルしい一軒のうどん屋にお這入りになりましたので私も這入りました。ほぼ満員でございましたが先生の隣に割り込みまして『先生』と声をかけました。先生はいつものビックリ表情で『どこへ行きますか?』等々おたづねになり乍ら配られた素うどんを召し上がりました。当時素うどんは三銭か五銭で外食としては最低価格のものでございましたのでその質素なことに感銘致しました。爾来私はうどんをいただく度にあの梅田駅前のうどん屋での感銘と同時に、生れてはじめて衆人環視の中で英語ばかりを使ってお話をしたことのうれしさを想い浮べます。」と書いています。

東京女高師—これは日本の女子教育では古くから評価され現在のお茶の水女子大学として有名な学校であります—そこの教師をされた木村婦<sup>きむらふ</sup>み様がこう言っておられます。デフォレスト先生は日本語もお達者だったんですけれども英会話の時には日本語をお使いにならなかった。「解りにくい事は手真似や身振りをせられ、今一つの組などでは Jack fell down の意味が解らない人があつて転んでお見せになったさうです。」あの謹厳なデフォレスト先生が床に転んでまで学生たちに転ぶということを教えたんだな、これは学生たちの心にはずいぶん深く残っただろうなと私は思うわけでございます。

最後の証人は溝口百合<sup>みぞぐち ゆり</sup>さんであります。本学の高等女学部57回、高等部英語師範科60回のご卒業であり、同窓会長も務められ、また理事もお務めになり、また元神戸女学院大学学長・溝口靖夫<sup>みぞぐちやすお</sup>先生のご夫人であります。1972年4月12日の溝口靖夫先生宛ての書簡であります。百合様はそれを訳してくださいました。「溝口さん、あなたは昨夜<sup>ゆうべ</sup>のハリウッドのオスカー賞の授賞式のテレビを見ましたか?多分日本にも人工衛星でテレビに映ったと思うのですが、どうですか?もっともあなたにはそんなリラックスする暇はなかったかもしれませんね。溝口さん、あなたは昔、神戸女学院の教職員のパーティでチャプリンのものま

ねをしたのを憶えていますか？私がチャプリンというのを知ったのは、その時が初めてでした。そしてチャプリンって何と面白いのだろうと思いました。昨夜、私がどうして見たかったかというわけは、あなたが昔ものまねしたチャプリンと本当のチャプリンがどれだけ似ているか、見たかったからです。それで私には、あなたが昔演技したのが本当に上手だったということが、昨夜わかりました。溝口さん、あなたは多分今は非常に忙しくて(学内の要職をされた、学園紛争のあった頃でございます。)、そんな面白いものまねとか、そんなことをする暇はないのかもしれませんが。けれども、あなたはこういう諺を知っているでしょう？“All work and no play makes Jack a dull boy.—もう働いてばかりいて遊びを知らないジャックは魅力のない鉛のような少年になる。”だから溝口さん、時には、楽しい笑い、リラックスを忘れてはいけませんよ。」と記されております。私は、人がユーモアをもって笑うというのにはいろんな説があり、これは一つの考えではございますが、transcendent reference point〈超越的な参照点〉を持つことだと思っています。ちょっと難しいことを申しますが、われわれはキンキンした現実の葛藤の中ではなかなか笑えないのであります。しかしながらわれわれを超えた視点 transcendent reference point を持つ時にすべてを相対化して笑うことができるのではないかと思います。

## 祈りの人

そのことはデフォレスト先生の祈りということに通ずるわけであります。祈りは彼女にとっては、困った時に、悩んだ時に、超越的な視点を与えました。彼女はこう言ってます。「私は恐怖をもったり、神経を尖らせる様な事があった場合は、黙って抑へておかず、直ちに、偉大なる救護者『神』にこれを委ねて救って頂きます。」

彼女は祈りの人であった。武田清子さんはこう述懐しています。1941年12月戦争が始まります。彼女はニューヨークに、ユニオン神学校にいたわけであります。「太平洋戦争が勃発した時、私はニューヨークで学んでいた。その翌年の初夏、交換船で帰国する機会のあることを告げる電報を日本大使館より受けとった。(そしてデフォレスト先生をボストン郊外のアーバンデル(Auburndale)

というところにあるウォーカーハウス(Walker House)に訪ねます。)時局の緊迫のために離日を余儀なくされてボストンに帰っておられた先生のもとにお別れに行った。先生と私は静かな松林を語りあいながら散歩した。先生は『私は日本の人びとを信じています。一日も早く日本に帰りたい』と言われた。そして、松林の中で腰をおろし、『御一緒に祈りましょう』と言われた。先生は平和のため、また、日本人のために熱心な祈りを捧げられた。そのお祈りは戦争の間中、私がくりかえし思いおこす心の支えであった。」と述べておられます。

### むすび

私どもはデフォレスト先生の生涯と思想を辿ってまいりました。とくに戦争中の苦難の中にも希望をもって生き抜かれた生きざまを学んでまいりました。そしてデフォレスト先生へのいっそうの敬慕の念を私どもは深めたことと思います。しかし私どもはそれに留まらず彼女の心を心として、一人一人が愛神愛隣の精神を生かすものとなり、気品のあるそして芯のある女性指導者たちがこの学園・神戸女学院から輩出されるように祈って止みません。

ご静聴ありがとうございました。

(拍手)

### おわりに

(飯謙先生)

竹中先生、どうもありがとうございました。新しい126年目に向かって、また21世紀に向かって、また新しいミレニアムに向かって、神戸女学院に幻を抱かせ、また方向づけさせる、大変素晴らしいご講演をいただきましたこと、感謝申し上げます。もう一度感謝の拍手をお願いいたします。(拍手)—ありがとうございました。